

# 山形県最上郡最上町活性化プロジェクト

文教大学 経営学部 経営学科 教授 鈴木 誠

「最上町を活性化できないだろうか」という漠然とした発案は、かつてニューヨークに同じ時期に勤務していた金融業界の仲間の一言であった。農業素人集団が一体どのような貢献をすることができるか、われわれの挑戦が2017年春始まった。

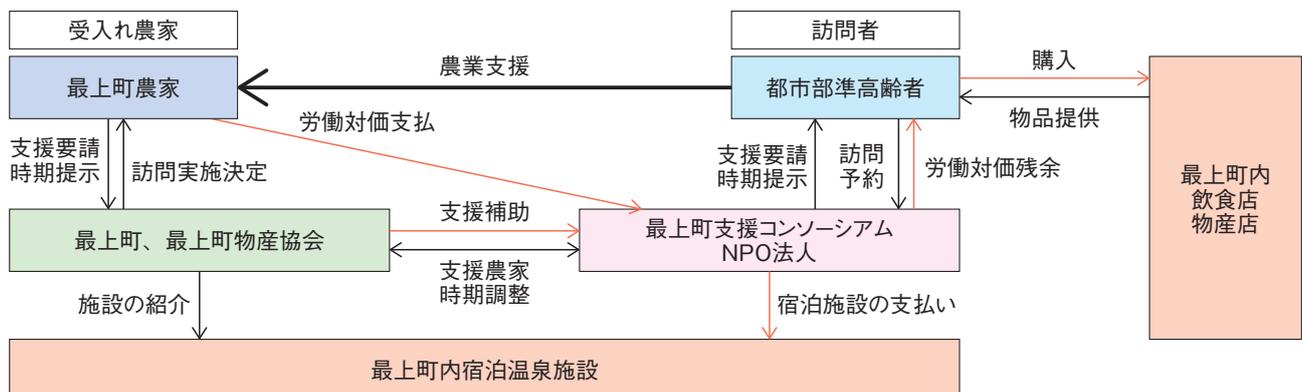
## 1 プロジェクトの概要

われわれは、まず、地域活性化のモットーとして、「最上町の人、地域、そして携わるすべての人に喜ばれること」を掲げた。特に、われわれの強みである金融を意識し、お金がうまく地域で循環するように工夫することを志した。

まず、2017年3月から地域のニーズを知るために、最上町の農家、役場そして物産協会の有志の方々と手を組んで、ニーズの掘り起こしを行った。4回の現地訪問を通じた基礎調査では、最上町の主要生産物が農作物であること、営農者年齢の高齢化と営農人口が減

少していること、そして、後継者不足が問題となっていることなど、日本のごく普通の農村部に見られる構造的な問題が浮かび上がってきた。翻って、われわれが生活する都市部では、農村部とは異なる問題が顕在化している。「年金支給開始までの空白期間問題」である。一般のサラリーマンは、60歳定年が選択的に延長されているものの、65歳の年金支給開始年齢まで完全雇用が約束されているわけではない。仮に継続雇用されたとしても、役職手当がはずされ、給与水準が著しく低下するなどの収入面で不安も少なくない。肉体的には十分に勤勞し得るシニアであっても、標準的な年金受給年齢までまだ数年の空白期間を有する不安を抱える人は少なくない。例えば、東京都で61歳以上、65歳以下の人口(以下、準高齢者層という)は67万5千人(東京都の総人口の5%)である。仮に、継続的に勤勞できる環境がある準高齢者が1/3と見積もった場合でも、20万人を上回る準高齢者層は「年金空白

第1図 プロジェクトの構想図



(注) 1 支払はすべて仮想地域通貨で行う。  
2 仮想地域通貨は法定通貨との交換はできない。

期間」に不安を抱えていると見られる。ただし、体力に自信のある準高齢者層は見方を変えれば、潜在的な労働供給市場とみなすことも出来る。人生80歳時代から100歳に向かうにあたり、退職後の資金の維持が生活上の大きな課題となるからである。

最上町のニーズと都市部のニーズを相互に補完するマッチングを行い、うまく取引することができれば、2つの問題を同時に解決する糸口が見えるのではないかと考えた。(第1図)

われわれの解決案は、最上町で不足する労働量を都市部の準高齢の働く意欲のある支援者によって賄い、同時に、労働対価で支援者の資産の目減りをできるだけ防衛するというものである。ただし、労働対価の支給と利用については地域振興を図る上で工夫が必要となる。そこで支援者への労働対価を仮想地域通貨によって支払い、この通貨によって滞在中の費用を賄う仕組みを考案した。この仕組みを利用するならば、労働によって得られた対価は基本的に最上町にて消費されなければ価値を失うため、他地域に持ち出しされることは無いばかりか、支援者による滞在中の消費を促進する。また、行政による支援も確実に地域振興に役立つことが期待される。

## 2 農業支援パイロットプログラム

われわれは調査期間に続く2018年に図のプロセスを想定した学生による農業支援を実施した。参加者は過去に農業体験のない素人である。一方、受け入れ農家は、地域のパートタイマーを雇用する専業農家である。農業支援実験は期間1週間、目的は農作業の支援と支援者である学生の滞在・消費を労働対価により賄うことであった。支援先は、アスパラ



最上町支援先農家と文教大学生(2018年9月)

ガス、トマト、里芋、シイタケ、サンチュ、ニラ、リンドウを生産する9軒の農家に協力をいただいた。

最初の全体顔合わせでは不安を抱いていた学生達も2回のBBQを通して、次第に農家の方々との距離が縮まっていった。われわれの目標は一応達成することができた。また、参加学生にも概ね好評であったが、課題が無いわけではなかった。支援先農家からは、労働対価と支援者による労働内容・作業量についての改善要請が少なからず呈された。日頃から、パート従事者を恒常的な労働力とする農家から見れば、無経験の支援者に同じ対価を払うことへの違和感は当然のことと言える。プロジェクトで対象とする都市部の農業経験の無い準高齢者に対する、支援先農家の労働対価と作業成果の不均衡への不満解消が今後の課題となっている。

## 3 本格的な稼働を目指して

2019年はプロジェクトの本格稼働を想定して、都市部在住者を対象とした短期のプログラムを実施する予定である。前回行き届かなかった点を改善し、支援受け入れ農家も支援者も共に満足のいく結果となるように尽力したいと考えている。

(すずき まこと)